

# 山と博物館

第49巻 第2号 2004年2月25日

市立大町山岳博物館



撮影 関田糸恵

「山博おもしろい」の  
ひとしを担いで

宮野典夫

平成十四年四月、「子供体験学習号」という路線バスの到着時間に合わせ、学芸員らが展示室で話してみようと「山博おもしろい」が始まりました。いまだ山岳博物館で継続してきた探鳥会やキノコ学習会なども「ミニゼミ」に位置付け、新たな企画としては河原でのクロツバメシジミ観察、普段はなかなか行くことができない鹿島槍本谷への踏査、百瀬慎太郎ゆかりの地を訪ねる等、野外でのユニークな活動も加わり、今でもそれぞれの学芸員らが自分の得意とする分野やタイムリーな話題などで展開しています。

本年度は「カモシカ」を中心にと考えていた私のところへ、「カモシカ」を題材に子供向けに環境やカモシカ自身のことを学んでもらう学習プログラムを組みたいという専門学校の学生が現れ、学校と博物館が共同でプログラムを作成することにしました。

本などから得た情報ではなく、自分たちが調べたことを伝えたいという学生の熱意から私にも調査に同行し、プログラムは学生が中心になって考え、カモシカになったつもりで夏に、調査員になったつもりで冬に、それぞれ市内の山林で実施しました。

学生にとっては調査中に得られた地形の特徴、生活痕の位置、カモシカとの遭遇度などから自信の持てるプログラムが完成し、目的が達成できたのではないかと感じています。また、ミニゼミに参加し、野外でカモシカと出会った子どもたちは、その感激と同時にカモシカとその環境とは何かを感じ取ってくれたものと確信しています。

(大町山岳博物館副館長)

# 歌に読む百瀬慎太郎の心情(前)

峯村 隆

はじめに

百瀬慎太郎(一八九二―一九四九)の短歌は昭和三十七年に刊行された遺稿集『山を想へば』に、明治四十四年(十八歳)から昭和二十三年(五十五歳・逝去の前年)までの六十二首が収められている。

これらは百瀬家に残るメモノートなどに記された多くの歌から、主に三女の遠藤三春氏が選んだものである。

筆者は歌のでき映えを論じる資質を持ち合わせていないが、折々の気持ちに素直に表している歌<sup>1</sup>をその中から拾い、今日までの調査研究の成果をあわせて百瀬慎太郎の心情を読みみたい。<sup>2</sup>

## 慎太郎と短歌

慎太郎の短歌との出会いは明治四十三年に旧制大町中学を卒業して對山館<sup>3</sup>にとどまることになって後のことで、中学同窓の小松宗邦・浅野賢三・腰原峯三らと安曇野短歌会に入り、さかんに歌を作りはじめた。

そして遺稿集の年譜では明治四十四年七月に、七歳上の若山牧水の門下となったことになっている。

しかし「後年、池田町に疎開していたアララギ派の歌人、岡麓とも親交をもち、島木赤彦に誘われ「アララギ」にも会費を納めていた。また、古泉千樫、長塚節の影響を受けていたともいわれる。慎太郎自身も「歌では生涯師をもたなかった」と述べていたといわれるように、流派を超えた自由な発想で、自然流露の歌境を示

し、晩年は古語を自由に駆使した格調の高い作品を残した。<sup>4</sup>

「慎太郎に歌の師なし」については、実娘三氏も同様の記憶をお持ちである。<sup>5</sup>

『昭和万葉集巻6』(一九七九・講談社)に収められた對山館廃業(昭和十八年)前後の次の五首は、雄大な北アルプスの峰々を彷彿させる秀作とされる。

遠雲をながめてあればま近くを

影をおとして走る雲あり

いくそたび我がのほりけむ山々の

姿を見れば眺めあかぬかも

大き谿深き黒部の谷々の

水音集まりて聞え来るかな

大槍は秀先かくりて明神の

岳は柵雲の支柱のごとし

(昭和十七年、四十九歳)

高山の嶺よりなだり落つる水

此の水を飲みて命永らふ

(昭和十九年、五十二歳)



百瀬慎氏所蔵印より

## 山と人

雪の嶺に吹きつけられし雲あまた

濁りて暗き高原の街

松原に続いて長き板橋を

踏めば悲しき我が心かな

(明治四十四年、十八歳)

慎太郎は明治三十九年、十三歳で初めて白馬岳に登り、以降急速に山に魅せられていく。

山は、大町・對山館・そして自己が共時的に存在する俗世界の対極にある「神聖な領域」と認識していた。二十歳の記述には、山は「万有であり、神秘であり、無限」だとある。<sup>6</sup>

慎太郎は中学卒業後、その素質の有無を問わず長男として旅館「對山館」を継ぐ定めを背負っていた。多感な文学青年であった彼は、明治四十三年一月ころ、二高(後の東北大学)受験のために仙台へ赴いたが、途中で使いの者に連れ戻されている。なぜ二高だったのか、なぜ目的を完遂できなかったのか……。真意はまだまだ謎である。

若き日の夢こそかなし春の雨の

草の若芽にす、りなく時

我とわがうらぶれ心あざ笑ひ

あざわらひつ、も生きてゆくかも

(大正二年、二十歳)

空虚なる此の我が心うちのせて

行くべき旅のたのみがひなや?

君よかの安曇のはてにうづもれて

淋しむ子等に筆とり給へ<sup>8</sup>

此の一時の堪へがたきかな

(明治四十五年、十九歳)

二高受験の挫折の後、大町・對山館に身を置き続けた慎太郎にとって、生きる支えは神聖な山そのものであり、辻村伊助ら山を愛し、その真髓に自らの肉体をもて歩み寄ろうとする純粋な人々との交わりだった。<sup>9</sup> 後述するように性格的に宿屋稼業に馴染まず、嫌っていった

慎太郎にとって、寄寓にも彼らとの出会いの場が、その宿屋「對山館」だったのである。

受験の挫折ばかりが原因ではなからうが、二十歳前後には空しき、悲しみ、孤独感を吐露した歌が多い中で、山の靈気に震えるような歌をも残している。

嶺近き石の小室の板屋根に

またはひか、る山の夜の霧

新しき生命ほりして大山に

対へど山はたゞ黙し居り

石室の一夜はひとりトポトポと

絶えも入りなむ灯影見守る

消えか、る櫓の灯影に迫り来る

山の夜霧に冷えし唇

谷の雪また没落の叫びする

其の絶間にも啼くか駒鳥

(明治四十五年、十九歳)<sup>10</sup>

明治四十四年十月、慎太郎は十八歳にして黒部の主こと遠山品右衛門とその長男作十郎

の案内で初めて針ノ木峠に立っている。<sup>11</sup>

「峠の上に立った気持は寂寥そのものであった。その寂しさが他では味はれない魅力のように思

はれた」<sup>12</sup> という心情の理解には、こうした歌々が助けになる。

山と人との出会いは、悲観的・感傷的傾向

にあった慎太郎の心根に凍とした山岳観と、そ

れを基とする人間観を、水晶の如くゆつくりと

結晶させていったと考える。

ほろ／＼と砕けがちな岩の根に

一茎咲けり高嶺龍膽

(明治四十五年、十九歳)

家業と山の狭間で

小犬さへ食物のためおまはりも

チンチンもする悲しきことぞ

(大正二年、二十歳)

宿屋の息子此のなりはひのかなしさを

歌へば母は黙したまへる  
ひたすらに我が家業のみいそしめと  
おなじき事を母繰り返す

此の柱よれば悲しき我が顔が  
うつるなりけり大黒柱  
部屋々々を我が訪ひゆきて書きしるす  
旅人の名は悲しかりけり

折々の我が気まぐれが半被など  
着て庭を掃くしぐさかなしも  
宵々の父が微酔にうるみたる

瞳を見れば泣かれけるかな  
(大正三年、二十一歳)

慎太郎には十二歳離れた弟孝男がいた。この時点でも、できることなら弟に家督を譲り、文学の道へと再び歩を踏み出したかったのではなからうか。

よしもなき此の寂しさをいかにせん

我が弟はいまだ幼か、り  
(大正三年、二十一歳)

だが一方で、山はやはり慎太郎に大町・対山館で生きる大いなる力をあたえ続ける。

歩は山へと向ったのだ。

大正二年七月、伊藤菊十、勝野玉作、伝刀林蔵の案内で針ノ木峠より大黒岳を経て平川の雪渓を下降する、慎太郎の言うところの「後立山連峰逆走」に成功して登山史に記録を残し、八月には遠山品右衛門の次男兵三郎の案内で烏帽子岳から途中鷲羽岳・黒岳を往復して槍ヶ岳に至る大縦走をしている。

鹿島鎗槍の穂先の白雪を

染めて赤々日は沈みけり

嶺近く星の光れりおごそかに

た、なはる岳のさびしまれる  
憂鬱の心静かに燃えてけり

夜空に白く山脈は走りおり

此の憂ひ雲ともなりて消えもゆけ  
まぶしく嶺の雪が、やけり  
(大正三年、二十一歳)

大正三年七月、大西又吉、丸山市三郎の案内で初めて立山・剣へ。この夏には後に友の中の友となる石川欣一と出会い、十二月には熊井みつると結婚している。

屋根石の黒きもだした我が心  
心静かに眼をこぢにけり  
立枯の楢の木肌をうちひたす  
雪解の水にぬる、心ぞ  
(大正三年、二十一歳)

歌を追いつく足跡を辿るとき、大正三年は慎太郎にとって画期的な年であったと思えてならない。

翌大正四年から九年までの歌は、残念ながら欠落している。

だが、□大正五年、信濃鉄道の松本〜大町間全通、登山者急増。□六年、長女美江誕生、大町登山案内者組合結成。□八年、信濃山岳会発足、幹事就任。□九年、次女美和誕生・・・と年譜の事象を追えば、公私ともに充実した時の多かつただろうことが想像できる。

次の文章はそうした慎太郎の働きぶりをよく描写しているので、引用したい。<sup>13</sup>

「対山館は三階建て入ると長い横土間があり、腰掛けられるようになっており、正面右側に大きな高い階段があつて二階三階に上がるようになっていた。女中さんや家人が客の応対にたえず立ったり坐つたりしている。幾組かの早立ちの客が大きな荷を負つて山に向つて立つて行った。こんな中に帳場に坐つていた氏は、山行の相談をすると立つて来て桐で作つた硯箱を下げてくる。これは相当かさばつたもので、下

の方は小引出が二つほどついており、上のあけぶたをとると硯箱になつてゐる。そして必ず巻紙だつた。

客の山行の相談を要領よく聞いて、適當な助言をしてくれる。あそこは危険だから越中側を巻けとか、あそこには水がないとか、その目的と同行者では、そこまでは行きかねるからどこで泊れとか、その間に所用泊数と人数をならみ合せて、米がいくら味噌が何程、野菜がどう、缶詰が何本、お茶がどのくらいと記して行くのだった。それからそのあと案内や強力で一人一日五匁の割合にハギという刻み煙草を幾日だから何匁と計算し、帰りの馬車賃は客の負担で、富山に出るから直江津をまわると一日では帰れないから、一泊二日の泊り料と人夫賃まで書き添え、これは直人がよいでしょうと、待機しているガイドを呼んで言いつけるのだった。そしてその巻紙を当番の男衆に渡すと忽ち所用品が客の前に集められた。<sup>14</sup>



百瀬氏所蔵印より

ただ、対山館での慎太郎の働きは山に限つたことで、三代目当主<sup>15</sup>として経営全般に采配を振るうことはなかった。慎太郎の実弟百瀬孝男も次のように述懐している。

「兄は山だけは一生懸命やった。普通の商売には向かなかつた。暇だとかかへぶいって出て行って、父は嘆いていた。「慎太郎には困つたもんだ」と。「山を想へば人恋し」ではないが、山がなくなるとすぐ友達のところへ行ききた

くなり、しょっちゅう旅をしていて、家を空けることが多かつた。<sup>16</sup>

実質的な帳場の仕事は終生父金吾が努め、昭和八年に金吾が亡くなつて後は、慎太郎の義弟熊井文吾の夏場の応援などに支えられ、もっぱら長女美江が廃業の昭和十八年まで務めたという。<sup>17</sup>

山路の雨に濡れつ、吾が行く  
(大正十年、二十八歳)

その後、遺稿集には大正十年(二十八歳)、大正十五年(三十三歳)、昭和十五年(四十七歳)から二十三年(五十五歳)までの短歌が収録されている。

年代が不連続で、収録数も年によって大きなばらつきがあり、歌から連続した心情の変遷を追う作業は不可能である。そこで、いくつかのテーマで歌を集め、心の移ろいを探つてみたい。

### 山への思慕

靡きつ、煙はのぼる見つむれど  
見つむれどなほのほり熄ますも<sup>18</sup>  
夏草のしげみに熟れし木苧を  
喰みつ、歩む霧の山みち  
(大正十年、二十八歳)

かつて感傷的に過ぎる趣きの強かつた山への思いは、右の二首を経て晩年には滔々たる山界との融合の境地にまで達した、と解釈することには無理があるうか。

白くたぎりと、るに響く溪水の  
音をき、あればうつ、ともなし  
大山祇の神のゆるしをうけまくと  
ぬき奉る山に入る日は  
七倉と不動を越えて高瀬谷  
夕べ静かに雲たたなはる

（昭和十七年、四十九歳）  
遺稿集の年譜によると、昭和十七年六月、  
慎太郎は住友男爵こと泉幸吉らに「対山館廃  
業」をほめかし、八月には針ノ木・大沢小屋  
に長く籠っている。

此の山を吾が山と思ひこの小屋を  
我が家と思ふ心安けし  
白々と小屋の窓辺ゆ流れ入る  
霧のしめりもなつかしく思ふ  
（昭和十七年、四十九歳）

戦時色が強まる中、対山館をめぐる葛藤の果  
てに、「昭和万葉集」選歌四首を含む優れた作  
品が山懐で醸成されたと推察する。  
いつくしくた、なほは山の裾にして  
わが五十年は過ぎ去りしかな<sup>19</sup>  
（昭和十七年）

酒とともに

酒は慎太郎の生涯の友であり伴侶であった。  
対山館での日常は「独酌でちびりちびり」。機  
嫌のよいときには娘などを相手のユーモアとウ  
イットにあふれる四方山の話がはずんだ。近隣  
の知人も、そんな面白い話を聞きたくて大勢集  
まったという。また、最も居心地がよかった「茶  
の間」を慎太郎は「小使い室」と呼び、顔見知り  
が泊まると「いらっしやい、いらっしやい」と呼び  
寄せて四斗樽から注いだ酒を酌み交わし、語り  
合うことを楽しみとしていたという。<sup>20</sup>  
待つとなく待たる、となく独り酌む  
酒うすにがき春の宵かな  
（大正二年、二十歳）

大沢の爐辺の榎火赤々と

かたわらにして酌む酒美し  
爐はあかし汁はも美し酒ありて  
いふ言もなし鳥よ啼け鳴け  
（昭和十七年、四十九歳）

昭和十七年十月、隣組の遊山先の葛温泉で  
吐血。胃潰瘍だった。静養中にも身の回りに題  
材をとった歌を数多く詠み、十二月に快癒す  
る。<sup>21</sup>  
来べきものつひに来にけり他人事の  
如く思ひつ、吐きし血を見る  
吸呑といふを初めて使ひたり  
これが酒ならば可笑しかららむ  
癒えなばや朝な夕なに水かけむ  
この石の苔青くあらしめ  
酒に生き酒に傷つく我にして  
忘れたがる酒の味かも  
もろ人の我に言ふ言きはまれり  
酒やめよとふ飲むなど申す  
嘗てわれ菰冠りの正宗を  
傍におきて飲めりし思ふ  
（昭和十七年、四十九歳）

うつけわれ臥やれる君が枕辺に

たびたる酒を飲みしれにけり<sup>22</sup>  
（昭和十八年、五十歳）  
か、る世に生きてのぶべきすべあらば  
いのちの限り飲みて果てなむ  
（昭和二十一年、五十三歳）

対山館廃業、転居

いさかひの後の寂しさにひとり居て  
我がまがさがを悲しく思ふ  
此の怒のおきどころなし皿砕き  
器を割りて心空しき  
配給の酒の尽きれば遠去りし  
人思ふことただに寂しき  
（昭和十七年、四十九歳）

昭和十八（一九四三）年六月、対山館は明

治二十年代半ばからおよそ五十年の歴史を閉じ  
た。建物は軍需工場とされた昭和電工の寮とな  
り、戦後は個人の医院となる。百瀬家は対山館

南の目と鼻の先の借家に移り住んだ。  
古き家を売ってあらたに求めたる  
狭き家居をめぐらかに見つ  
いさぎよく業をやめしと人云へど  
我には残るかすかな名残  
亡ぶるといふ姿かも亡びゆく  
相は今日の吾のみにあらぬ  
わくら葉の散りのはげしき梅の木  
つばら青実は大きくなりぬ  
さにはべの梅の青実を採る夏も  
今年ばかりかつぶら青梅  
移り来し心寂しく思ふ事  
めとらぬ我の若き日のこと  
とろ／＼と燃ゆる榎火もなつかしや  
見てあれば浮ぶ山の友の面  
（昭和十八年、五十歳）

昭和十七年には実の弟か子のように可愛がつ

た熊井文吾が出征し、石川欣一も「マニラ新  
聞」創刊のために日本を去った。大町を訪れる  
登山者も、対山館の宿泊者もめつきり減ってい  
った。そして廃業後の十八年十一月には山田珠  
樹が世を去る。  
館をも失った慎太郎が、至近の佐住いから主  
なき館に目をやる当時の心境はいかばかりだっ  
たらう。  
（つづく）  
（大町山岳博物館学芸員）

- 1 三女遠藤三春氏（二〇〇四談話）によると、掲載した歌の  
多くは作品として推敲を重ねたものではなく、折々の気  
持ちを日記のように歌にとめたもので、遺稿集掲載の  
文章に比して構えのない、率直な感情表現だといふ。  
2 慎太郎の誕生日は明治二十五（一九〇二）年十二月十日な  
ので、本稿では「満年齢」を表記の原則とする。  
3 本稿では、引用文を除き創設当初の旧字名称を尊重して  
「対山館（たいざんかん）」と表記する。  
4 飯島喜久代「山岳博物館企画展解説（二〇〇二）」より。  
5 次女井垣美和氏、三女遠藤三春氏、四女寺田美穂氏談話  
（二〇〇二）、大町山岳博物館収録。  
6 百瀬慎太郎「後立山連峰逆走記」（一九一三）。  
7 慎太郎の文学的素質を小学校時代から青年期まで刺激し

続けた親友、内山重助への歌。二十代で鉄道自殺。  
若山牧水へ宛てた歌のひとつである。  
筆者「対山館の時代とは何だったのか」前（二〇〇二）、「  
山と博物館」第四十七巻第九号参照。  
9 遺稿の記述から、一連の歌は白馬岳登山の折の作と判断  
する。  
10 百瀬堯氏所蔵の当時の画帳より四十四年と判断した。遺  
稿集の年譜では四十三年とされている。  
11 百瀬慎太郎「針ノ木峠雑談」（一九四八）。  
12 引文冒頭の「横土間」は昭和六年ごろ洋風の食堂に改装  
されたので、案内者組合結成以降の大正中期からそれま  
での間の様子と考えられる。  
13 横内寅「百瀬慎太郎 山を失う」（一九六二）、日本山岳会  
「会報」二百二十号。  
14 一般に慎太郎は二代目とされているが、明治二十年代の  
対山館誕生当時は、跡継ぎに実弟金吾を迎えていた百瀬  
新栄が当主だったと考えられる。新栄から数えると三代  
目にあたる。  
15 百瀬孝男氏談話（一九八八）、石原きくよ丸山影収録  
大町山岳博物館収録。  
16 井垣美和氏、遠藤三春氏、寺田美穂氏談話（二〇〇二）、大  
町山岳博物館収録。  
17 「神河内行十五首」のうち焼岳について。  
18 「いつくしい」には「美しい」と「厳しい」の二意がある。  
19 井垣美和氏、遠藤三春氏、寺田美穂氏談話（二〇〇二）、大  
町山岳博物館収録。  
20 遺稿集では「病中雑吟」と一括されているが、実生活の  
端々が見えて興味深い。  
21 親友、フランス文学者山田珠樹宅にて最後の面談（三月  
の折の一首、十一月山田逝去）。

訂正とお詫び

第四九巻一頁二頁三頁目九行の「三心皮性の合心離  
ずい」、三頁四段目三行の「柱頭は二は、それぞれ「三  
心皮性の複合離ずい」「花柱は」の誤りでした。訂正  
するとともにお詫びいたします。

報告

二月十七日、博物館付属園で飼育してい  
たライチョウ（オス）が死亡しました。

山と博物館 第49巻第2号

二〇〇四年二月二十五日発行

発行 千歳市立大町山岳博物館

〒020-0801 千歳市立大町山岳博物館

TEL 0126-261-1111

FAX 0126-261-1111

E-mail: shanshupaku@city.omachi.naganano.jp

URL: http://www.2city.omachi.naganano.jp/sanpaku/

印刷 株式会社印刷  
定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）  
郵便振替口座番号 〇〇五〇四一七一一三九三